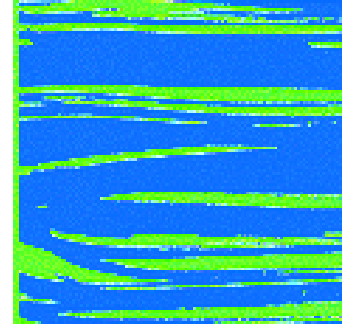


日本行動分析学会ニューズレター J-ABA ニュース



2008年 冬号 No. 49 (2008年2月15日 発行)

発行: 日本行動分析学会 理事長 藤 健一

603-8577 京都市北区等持院北町 56-1 立命館大学文学部心理学研究室内

FAX: 075-465-7882 (日本行動分析学会事務局と明記)

URL: <http://www.j-aba.jp/>

E-mail: j-aba.office@j-aba.jp

第26回年次大会の御案内

..... 日本行動分析学会第26回年次大会準備委員会 委員長 林部英雄
第5回日本行動分析学会実践賞候補者公募のお知らせ 研究教育推進委員会
「行動分析学研究」のバックナンバーを割引販売します!

..... 日本行動分析学会事務局
「行動分析学が学べる大学」情報更新のお願い

..... 研究教育推進委員会・広報委員会
行動分析学メーリングリスト beemail に御参加下さい 広報委員会
動物実験における倫理問題についてのアンケート結果報告 森山哲美
自主公開講座報告:

日中講演会「障害児・者包括緯線に向けた国際連携(1):

中国における障害児教育と障害者福祉の現状の展望 望月 昭

障害のある子どもの豊かな暮らしを実現する特別支援教育の在り方 ... 平澤紀子

追悼: 寺田雅英さん逝く

寺田君のこと 金子尚弘

寺田雅英さんの思い出 中島定彦

私とABA(2): いろいろな国際会議 佐藤方哉

連載: いま, こんな研究しています(4) 村本浄司

編集後記 ニュースレター編集部

第26回年次大会の御案内

日本行動分析学会第26回年次大会準備委員会 委員長 林部英雄

暦の上では春とはいえ本格的な暖かさにはまだ間がある毎日ですが、会員の皆様には御健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、2008年度の日本行動分析学会の開催は横浜国立大学がお引き受けすることになりました

た。本学教員の学会員は3名で、全員が教育人間科学部障害児教育講座に属しております。このこともあって、理論的・基礎的な研究発表に加えて、特別支援教育に関わる研究発表・シンポジウム等も歓迎いたします。また教員養成系

学部での開催であることから、小中養護学校等の現職教員の方々の参加もお待ちし、その方たち向けの企画も計画しております。しかし、何分にも小さな所帯で運営しなければならず、充分なことにはできないかと思っておりますが、学会員諸氏の御援助を仰ぎながら、準備委員一同できる限りのことはさせていただきたいと思っておりますので、何卒宜しくお願い申し上げます。

開催日程は、大変暑い時期ではありますが、8月9日・10日の2日間とさせていただきます。会場は、横浜国立大学常盤台キャンパスで、必ずしも交通の便に優れてはおりませんが、横浜駅からバスで15分ほど、その他横浜市営地下鉄、相模鉄道の駅から徒歩でもお出でになっていただけます。特に市営地下鉄では、新横浜から4つめの三ツ沢上町から歩いていらっしゃれますので、関西方面から新幹線でいらっしゃる方には、まずまずの立地かと思っております。

横浜は2009年に開港150周年を迎えます。日本の他の大都市に較べれば、大変新しい都市ではありますし、街中を大きな川が流れていないという、大都市としては大変珍しい立地となっております。これも自然発生的な街ではなく意

図を持って造られた都市であることを如実に示しております。その意図を汲んだ人々が集まってきたからでもありましょうか、一般に横浜の人々は順応的でかつリベラル、つまりどのような人でもどのような物でも容易に受け入れるという特徴があるといわれております。

いずれにしましても、キャンパスからほど遠からぬ、港の周辺に足をのばしていただければ、世界最大のチャイナタウンや、開港間もない頃に思いを馳せることのできる外国人墓地、赤レンガ倉庫、それに「みなとみらい」地区の現代的スカイスクレーパー群等、観光名所にも事欠きません。また古くからの繁華街である伊勢佐木町では、一步裏通りに足を踏み入れていただくと、韓国、タイ、ベトナム等の日本人向けの味になっていないオーセンティックなエスニック料理を味わっていただくこともできます。

このように全てを抵抗なく受け入れる横浜を、アーバン・ヒーリングの場として学会共々味わっていただければ、誠に幸いに存じます。

数多くの皆様の御参加、御発表を大会準備委員一同、心よりお待ちしております。

第5回日本行動分析学会実践賞候補者公募のお知らせ 研究教育推進委員会

日本行動分析学会では、わが国における行動分析学を応用した実践の普及や行動分析学の啓発を目的として、日本行動分析学会学会賞(実践賞)を設けています。

選考の対象となる実践は、現代社会における課題を解決するために行動分析学を応用して顕著な実績をあげた個人または組織です。日本行動分析学会の会員である必要はありません。これからの活躍が期待できる萌芽的な取り組みも選考対象となります。

自薦・他薦は問いません。「こんな素晴らしい実践はぜひ強化しよう!」「この人たち(私たち)

の取り組みを強化して下さい!」という声を、候補者推薦という形でどしどしお寄せ下さい。

Q: 推薦するためは?

A: 〆切は2008年2月29日(消印有効)です。

Q: 推薦に必要なものは?

A: 候補者名と連絡先および800字程度の推薦文と論文やレポートなどの資料です。学会webサイト(<http://www.j-aba.jp/>)から書式をダウンロードしてお使い下さい。

Q: 推薦書類の送付先は?

A: 学会事務局まで郵送して下さい。

Q: 過去の受賞者は?

クラブ, 京都市立総合支援学校 (全7校)

A: 下記の通りです。

第1回: 高畑庄蔵氏 (当時富山大学教育学部
附属養護学校)

第2回: 野口幸弘氏 (大野城すばる園)

第3回: 山崎裕司氏 (高知リハビリテーション
学院)

第4回: 刎田文記氏 (国立職業リハビリテーショ
ンセンター), アニマルファンシアーズ

選考は来年3月の常任理事会で行われ、来年度の年次大会にて授賞式を開催します。賞金は5万円です。推薦は〆切まで随時募集しています。思いついたら吉日。皆さまからのたくさんの推薦をお待ちしております。

ご質問・ご相談は担当理事までどうぞ。

研究教育推進委員会 浅野・島宗

「行動分析学研究」のバックナンバーを割引販売します!

日本行動分析学会事務局

このたび、学会では「行動分析学研究」のバックナンバーを期間限定の割引価格にて販売することとなりました。対象は、刊行済みの「行動分析学研究」全号となります。期間は2008年3月～8月までの半年間、価格は1冊500円(会員価格の半額!)とします。通常号、特集号(小特集を含む)にかかわらず1冊500円です。さらに、刊行済の特集号全号(12冊)を一括でご注

文いただく場合は、特集号全号(12冊)で5000円という特別価格で販売いたします。

注文手続き等の詳細は、次号の「行動分析学研究」送付の際にご案内を同封いたしますので、そちらをご覧ください。バックナンバーを揃える絶好の機会ですので、このチャンスをお見逃しなく!

「行動分析学が学べる大学」情報更新のお願い

研究教育推進委員会・広報委員会

どこの大学でも、そろそろ来年度のカリキュラムが決り、シラバスの入稿も完了する時期と思います。この機会に、併せて日本行動分析学会web siteに掲載しております「行動分析学が学べる大学」への情報の提供・更新をお願い申し上げます。

尚、情報の正確さを期すため、情報提供は教員の方に限らせて戴きます。

メールで情報を戴ける方は、以下の項目にご記入の上、bap@j-aba.jpまでお送り下さい。記入例は、既存の<http://www.j-aba.jp/university.html>を御参照下さい。

行動分析学メーリングリスト beemail に御参加下さい

広報委員会

2008年1月13日に、beemail (ビーメール) という、日本行動分析学会が運営するメーリングリスト (ML) を開設致しました。これまで、bml という ML が行動分析学に関する情報交換に利用されておりましたが、諸般の事情から運営を続けることができなくなり、第 25 回年次大会での総会決議を経て、日本行動分析学会が、会員以外でも誰でも参加することができる新しい ML を運営することになりました。技術的な問題から開設が予定より3ヵ月程遅くなりましたが、皆様の御協力を得て、順調なスタートを切ることができました。この記事を書いている 2008 年 2 月 11 日 11:28:55 現在、参加登録数は 90 名です (図 1)。今後、日本行動分析学会から会員の方々

へのお知らせも、beemail を活用していくことになると思います。皆様の御参加をお待ち申し上げます。参加登録の方法は下記 URL を御覧下さい。

<http://www.j-aba.jp/beemail-j.html>

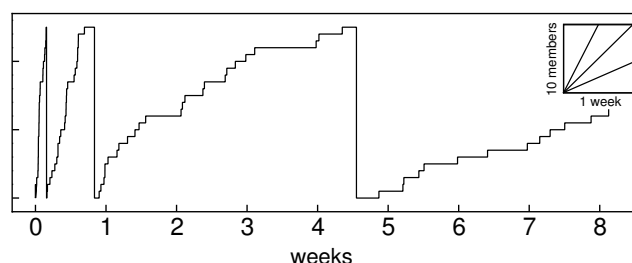


図 1. beemail 参加登録者数の累積記録

動物実験における倫理問題についてのアンケート結果報告

常磐大学 森山哲美

昨年、立教大学で開催された第 25 回年次大会で、「行動分析学と獣医学の立場からみた動物実験における倫理問題」の研修会が開催されました。この研修会は、本学会倫理委員長の中島定彦氏が発起人となって、愛知県立看護大学の鎌倉やよい氏と桜井動物病院の桜井富士朗氏、そして私の 3 人が話題提供者となって行われました。鎌倉氏には、看護・医療の倫理の視点について話をさせていただき、桜井氏には、家畜動物、愛玩動物、展示動物の疾病治療、衛生を問題とする獣医学の視点から動物実験の倫理について話をさせていただきました。私は、動物実験を肯定する者と反対する者のそれぞれの行動随伴性に目を向けて、動物実験に適切な倫理とは何か、それについて話をしました。それぞれの詳細な内容は大会論文集などに譲るとして、今回報告いたしますのは、そのときの会場の皆さんに私からお願いしました次のような動物実験の倫理に関するアンケートの結果です。

アンケートは、回答者の専門領域、そして所属、取得学位と取得年度、さらに性別を尋ねる

質問の次に、(1) 動物実験の経験の有無、(2) 職場における動物実験施設の有無、施設がある場合、研究対象としている動物種、動物実験の倫理規程の有無、(3) 心理学における動物実験に対する賛否、(4) 動物を対象にした研究の成果の利用状況、(5) 心理学における動物実験の将来に向けての発展性、(6) 動物実験が禁止されたときの仕事への影響、(7) 欧米と比較したときの動物実験に対する日本の規制の強さ、(8) 心理学研究における動物に対する人道的取り扱いに対する印象、(9) 動物福祉の指針に違反する者に対する弱化的妥当性、(10) 学部教育における動物実験の賛否、(11) 学部教育必修科目としての動物実験に対する賛否、以上を尋ねました。これらの質問は、Plous, S. (1966). Attitudes towards the use of animals in psychological research and education - Results from a national survey of psychologists. *American Psychologist*, 51 (11), 1167-1180. を参考にして作成しました。

動物実験の取り扱いについて、日本学術会議が「動物実験の適正な実施に向けたガイドライ

ン」(2006年6月1日)を作成しましたが、心理学における動物実験の倫理について会場の皆さんがどのように考えておられるのか、そして、学部教育における動物実験の意味についてどのように考えておられるのかを知るためのアンケートでした。

行動分析学はご存知のように、ハトやラットといった動物を対象にした実験的研究を基礎に発展してきました。草創期のころの応用行動分析家は、このような動物実験の訓練を受けた方が多かったように思われます。基礎と応用の両立がまさに行動分析学の発展をもたらしたといえるでしょう。しかし時が経つにつれ、行動分析学における動物実験の必要性は顧みられなくなった、否、その必要性が議論されるような状況が起こっています。本学会の学術雑誌である「行動分析学研究」や毎年行われる年次大会の発表を見ても、動物実験の成果を報告している件数は年々減少傾向にあるように思えます。温故知新ではありませんが、行動分析学の原点に戻ってこれからの行動分析学のありようを考えるために、動物実験の必要性を会場の皆さんがどのように考えておられるのか、それを知ることともアンケートの目的でありました。

さて、そのような目的で行われたアンケートの結果を以下に報告いたしますが、今回はそれぞれの質問に対する単純集計の結果報告までとさせていただきます。理由は、私の怠慢によるものです。クロス集計の結果報告は別な機会とさせていただきます。

回答者数は51名でした。まず、回答者の専門について、行動分析学と回答した方が7名、実験的行動分析学と回答した方が17名、応用行動分析と回答した方が3名、言語行動2名、選択行動1名、心理学2名、実験心理学2名、学習心理学3名、学校臨床1名、障害者就労支援1名、発達障害1名、保育士養成・教材開発1名、動物心理学・比較認知論1名、無回答10件でした。当然といえるかもしれませんが、行動分析学を専門とする方が半数以上となりました。学

位については、学部生1名、学士2名、修士16名、博士16名、無回答16名でした。男性が38名、女性9名、無回答4名でした。

動物実験を経験した方の数は40名(これを専門との関連で見ると、その内訳は行動分析学6名、実験的行動分析学14名、言語行動1名、心理学1名、実験心理学2名、学習心理学3名、動物心理学・比較認知論1名、障害者就労支援1名、発達障害1名、保育士養成・教材開発1名、無回答10名)、経験のない方が11名(専門との関連で見ると、その内訳は行動分析学1名、実験的行動分析学3名、応用行動分析3名、言語行動1名、選択行動1名、心理学1名、学校臨床1名)でした。これを見ると、専門を行動分析学、実験的行動分析学と回答した方はその多くが動物実験の経験者で、応用行動分析と回答した3名の方はすべて経験がない方でありました。

次に施設の有無についてですが、施設有りとは回答した方は37名、なしと回答した方は13名、無回答は1件でした。施設のある方が会場の多くを占めていたこととなります。施設のある大学名を五十音順に列記すると、大阪教育大学、大阪市立大学、関西学院大学、慶應義塾大学、駒澤大学、白梅学園短期大学、千葉大学、帝京大学、同志社大学、常磐大学、日本大学、明星大学、立命館大学でした。後、医学系大学とお答えになったのもありました。実験対象の動物は、ハトとラット、そしてマウスがほとんどで、他に金魚、カメ、イモリ、アヒル、ニワトリ、インコ、キンカチョウ、スunksでした。

次に上で述べた質問の、(2)施設がある場合、動物実験の倫理規程の有無、(3)心理学における動物実験に対する賛否、(4)動物を対象にした研究の成果の利用状況、(5)心理学における動物実験の将来に向けての発展性、(6)動物実験が禁止されたときの仕事への影響、(7)欧米と比較したときの動物実験に対する日本の規制の強さ、(8)心理学研究における動物に対する人道的取り扱いに対する印象、(9)動物福祉の指針に違反する者に対する弱化的受容性、(10)

学部教育における動物実験の賛否、(11) 学部教育必修科目としての動物実験に対する賛否、以上、それぞれの質問に対する回答結果を回答者数の百分率で報告します。いずれも無回答の割合を省きます。

まず、(2) 研究室がある場合、倫理規程を作成しているかどうかについて、作成していると回答した割合が 31.4 %、作成していないと回答した割合が 19.6 %、不明が 17.6 %でした。(3) 心理学の研究で動物を用いることに賛成の割合は 92.2 %、反対は 0、どちらともいえないは 7.8 %でした。(4) 仕事に動物研究の成果を頻繁に利用している人の割合は 54.9 %、ときどき利用している方の割合が 27.5 %、まったく利用していない人の割合は 15.7 %でした。(5) 心理学の研究で動物を用いることは心理学の将来の発展のために必要であると答えた方の割合は 92.2 %、不要であると答えた方は 2.0 %、どちらともいえないが 5.9 %でした。(6) 将来、動物を使った心理学の研究が禁止されるようなことになった場合、自分の仕事が深刻な影響を受けると答えた方の割合は 60.8 %、影響を受けてもたいしたことはないと答えた方は 21.6 %、影響はまったくないと答えた方は 13.7 %でした。(7) 欧米の規制に比べ動物実験に対する日本の規制が重いと答えた人の割合は 0 %、軽いと答えた方は 39.2 %、どちらともいえないと答えた方は 54.9 %でした。(8) 心理学の研究で動物は人道的に扱われていると答えた方は 49.0 %、扱われていないと答えた方は 5.9 %、どちらともいえないが 43.1 %でした。(9) 動物福祉の指針を守らなかったり、ひどい扱いをしてはならないという法律に違反したりした研究者の研究費を削減ないし取り消すことは妥当であると回答した方の割合は 74.5 %、不当であると回答した方は 2.0 %、どちらともいえないが 23.5 %でした。(10) 大学学部の心理学課程の教育目的で動物を用いることに賛成の方の割合は 86.3 %、反対が 2.0 %、どちらともいえないが 11.8 %でした。最後に、(11) 動物を使った実験的研究は、学部心理学科の必修科

目とすべきであると答えた方の割合は 56.9 %、それに反対の人が 13.7 %、どちらともいえないが 27.5 %でした。

文章で記しただけではぴんとこないと思いますので、(2) から (11) の質問について、以下の表で回答結果を示します。回答の種類で a とあるのは肯定的、b とあるのは否定的、c はどちらでもないという回答になります。表の中の数値はいずれも回答者数の百分率です。

表 1. 質問 (2) から (11) の回答の結果
(表中の数値は%)

	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
a	31.4	92.2	54.9	92.2	60.8
b	19.6	0.0	27.5	2.0	21.6
c	17.6	7.8	15.7	5.9	13.7

	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)
a	0.0	49.0	74.5	86.3	59.9
b	39.2	5.9	2.0	2.0	13.7
c	54.9	43.1	23.5	11.8	27.5

以上がアンケートの回答結果報告です。本来であれば、この結果について解釈をすべきところですが、これは読者の皆さんに考えていただいたほうがよいと思って、この紙面で述べることはいたしません。怠慢のそしりを受けることになるかもしれませんが、まずは皆さんが上記の結果をどのように捉えていただけたのか、それを私は知りたいために私の解釈をここに記すことを省きます。読者の皆さんのお考えをぜひお知らせください。

最後になりましたが、アンケートにご協力いただきました皆様にこの紙面を借りてあらためてお礼を申し上げます。また J-ABA News Letter の編集業務に携わっておられる望月要氏には、今回の原稿執筆にあたっていろいろとご配慮いただきました。この紙面を借りてお礼を申し上げます。

追伸：昨年の研修会終了後、ある会員の方から日本学術会議のガイドラインを受けて、それを行動分析家あるいは行動分析学会がどうとらえるのか、それを問題として話し合いをすべきではなかったのかとお叱りを受けました。御指摘いただいた重要な案件を不問にしたその責任は、研修会の司会進行をおおせつかった私の責任であります。この紙面をお借りして会員皆様にお詫び申し上げます。今後、本学会倫理委員会であらためて上記の問題を検討することを中島委員長にお願いすることにいたします。

上記アンケートについて、ご意見、ご質問のある方は下記の森山宛御連絡いただければ幸いです。

〒 310-8585
茨城県水戸市見和 1-430-1
常磐大学人間科学部心理学研究室
森山哲美
Tel & Fax 029-232-2585,
moriyama@tokiwa.ac.jp

自主公開講座報告

日中講演会「障害児・者包括緯線に向けた国際連携（１） 中国における障害児教育と障害者福祉の現状の展望 立命館大学 望月 昭

以下のような要領で自主講座を開催しました。

1. 講座タイトル：日中講演会「障害児・者包括緯線に向けた国際連携（１）：中国における障害児教育と障害者福祉の現状の展望
2. 開催日時：2007年10月31日（水）14：00～17：00
3. 場所：立命館大学 衣笠キャンパス創思館 1F
4. プログラム

総合司会とあいさつ：望月 昭（立命館大学文学部・教授）

講演 1 肖非先生（北京師範大学・教授）
「中国における特殊教育教師養成の歴史と現状」

講演 2 田学峰先生（河北省秦皇島市特殊教育学校・校長）
「中国における特殊教育学校の建設と発展」

講演 3 孟維娜先生（北京慧靈・理事長）
「中国の障害者と障害者サービス - 民間施設の立場から - 」

講演 4 田惠萍（北京星星雨教育研究所・所長）
「中国自閉症療育支援におけるNPOの役割と課題」

当企画は、行動分析学を軸にした「対人援助学」という諸学・職制の連携・融合をめざす枠組みを背景に、日中の研究者・実践者が協力しあい、障害のある個人に対する新しい支援モデルを、緊急のニーズとして抱える中国に立ち上げていくという目的のもとに実施された。講演をされた4先生は、中国の障害児者教育・福祉の一線で活躍されている実践研究者であるが、国立大学教授からNPOの代表まで、それぞれ異なる立場から、恐らくは本国でも類をみない“顔合わせ”の中で、中国の現状と展望について多いに語っていただいた。

応用行動分析は、中国に限らず、国際学会などではABAという略称で呼ばれ、「自閉症の治療法」という狭い意味で捉えられがちである。今回のシンポジウムは、中国という国レベルでの制度や障害児教育の教員養成のコンテンツ、地域における障害児者の支援の実態など、幅広い

中国の支援体制の現状が明らかにされた。その報告からは、必要な地域資源の拡充など、環境設定ぬきには、自閉症を含めた障害のある個人への十全な支援は不可能であることが改めて明示されたと思う。

ふりかえって、わが国における障害児者の支援のパラダイムを考えると、果たしていま、応用行動分析が、そうした包括的な「対人援助」の方法として認知されているかどうか。「特別支援教育」や「発達障害」といった制度や「新」概念のもとに、応用行動分析は大いに取り上げら

れることになったものの、その対応に対する社会的認識は、「関係としての行動」ではなく、個人属性へ回帰するかのようにつえられていないだろうか。

中国という「他山の石」としての実践を目の当たりにする中で、ふと、日本ではTEACCHのほうが、ふと行動分析的にみえているのではと思った次第である。

なお、このシンポジウムは、立命館大学人間科学研究所、岐阜日中美谷福祉協会、そして立命館大学応用人間科学研究科の後援も受けた。

障害のある子どもの豊かな暮らしを実現する特別支援教育の在り方

岐阜大学 平澤紀子

平成 19 年 12 月 1 日(土) 10:00 ~ 12:00、岐阜大学教育学部において自主公開講座「障害のある子どもの豊かな暮らしを実現する特別支援教育の在り方」が開催されました。

今回は、第 2 回日本行動分析学会・学会賞(実践賞)を受賞されている西南学院大学教授の野口幸弘先生をお招きし、ご講演をしていただきました。定員 100 名を上回る 142 名の参加者を得ました。参加者は、小・中・高校、特別支援学校の教師、教育行政担当者、施設関係者、保護者、市民、学生の多岐にわたり、関心の強さを反映しているようでした。

野口先生からは、長年の地域生活支援の実践を踏まえて、行動障害を示す人の事例を基に、利用者中心の支援システムを構築するための条件について教えていただきました。中心的なメッセージは、「豊かな暮らしを実現するには、僕だけが、あるいは施設だけが、行動障害に対応できるのではだめなのです。そのためには、関係者が成果を確認できるデータが大切であり、それによって、支援を再現し、拡大することが必要になるのです。なによりも、データは皆のご褒美になるのです。」というものでした。

行動障害は、対象者や家族にとってはもちろ

んですが、支援者にとっても労多く、利用者中心とはいいいながら、なかなか困難な課題です。とくに、地域生活となれば、専門職だけでなく、様々な人の協力を得ながら、一定の支援を提供していくことが求められます。野口先生のご実践では、支援資源が十分でない現状において、意志ある者を中心にサービスを作り出し、それを関係者で共有し、さらには行政担当者を巻き込みながら、サービスを構築していった経緯が語られました。行動障害の機能的アセスメントに基づいて、支援が組み立てられ、データをとることで、支援が継続され、拡大されたそうです。豊かな生活を目指して、地域生活を支えるということは、24 時間切れ目無く、対象者のニーズに合わせたサービスが必要です。そのためには、支援者にもご褒美が必要です。それがデータでした。

本講座は、筆者の所属する岐阜大学教育学部特別支援教育センターが、年 9 回行っている特別支援教育コーディネーター実践講座の一部を一般に公開しているものです。事後アンケートの結果は、満足度(とても満足: 5 - まったく満足でない: 1) は平均 4.5 と大満足でした。良かった点には、「QOL 向上の科学的な支援方

法が学べた」、「サービスを作り出すプロセスが勉強になった」、「データは非人間的と考えていたが、これは意味がある」等、伝えたいメッセージが受け止められたようです。課題は、「背景となる理論を知りたい、応用行動分析について知りたい」というもので、うれしい限りでした。

こうした公開講座を開催できましたのも、日本行動分析学会のご支援のおかげです。今後も、教育・福祉現場と協働しながら発達障害支援の推進に努力していく所存です。引き続き、会員の皆様のご協力、ご指導を賜りたく、お願い申し上げます。

追悼：寺田雅英さん逝く

寺田雅英さん（徳山大学）が2007年11月19日に心筋梗塞で急逝されました。1985年から10年間、日本行動分析学会の事務局で活躍し、学会の基盤を作り上げて下さいました。その御人柄と業績を偲び、お2人に追悼文を寄せて戴きました（編集部）。

寺田君のこと

白梅学園短期大学 金子尚弘

寺田君の訃報を聞いて驚くと同時に複雑な思いがこみ上げてきた。彼には、徳山大学に移るまでの15,6年間、非常勤講師やいろいろな仕事をお願いしてきたのである。

今も工作室に「寺田私物」と書かれたミカン箱くらいの段ボール箱が置いてある。中には木製の組み立て式迷路がきちんと納められている。20年程前、実験演習の非常勤講師をしていた田中毅君から博士課程を終える頃の寺田君を紹介された。「この人はラットに近道をさせたんです」と言われたのを覚えている。

彼が博士論文を書き終えた頃から、白梅の実験演習や私の行動分析ゼミを分担し、非常勤講師を務めるようになった。また、自閉症児の療育施設「コロロETセンター」の研修会で、講師役や夏合宿で八ヶ岳登山のビデオ撮影を引き受けたり、彼の留学経験を活かしてコロロメソッドの英訳や、そこでの療育の行動分析的解釈をまとめる仕事などをするうちに、応用行動分析学の世界に自然と入るようになったのである。

しばらくして私の研究室に自閉症の青年がアルバイトとして働くようになり、現在は長野県

立看護大学教授となった鈴木英子さん達を交えて、この青年にコンピュータを使ったアンケート集計作業や文書作成を依頼する一方、彼の学内外での行動の改善に取り組むことになった。寺田君の生真面目さは、彼の感性に合わないところもあったけれど、定例会議を主催させて仕事のスケジュールや反省点をまとめさせるといった手続きを細かに準備して実行していた。

一時、日本女子大の情報処理センターに就職が決まったが1年足らずで辞め、また白梅を拠点に、当時学長であった日本自閉症協会会長の石井哲夫先生の主宰する「子どもの生活研究所」で、療育についての共同研究や、コンピュータネットワーク化の手伝いなどに専念するようになった。

このような長い、いわゆる浪人生活が続いた後、今から5年ほど前、自閉症の青年の父親が徳山大学の教授として福祉情報学部の立ち上げに協力する際に声がかかり、それまでは避けていた地方への就職を決断したのである。徳山大学福祉情報学部福祉情報学科では、彼の応用行動分析学、コンピュータ、ネットワーク、映像技術

などの能力が全て活かされることになった。教育相談などの地域貢献や、援助の必要な子どもたちのキャンプへの参加など、野外活動の能力も役立って、大学のさまざまな福祉実践の重要な一員となったと聞いている。また、月に一度は東京に戻り、世田谷区の療育研修会の講師も務めていた。

白梅時代には帰りが同じ方向だったので、時々、大井町に帰る彼のフォルクスワーゲンで送ってもらったり、一緒に電車で帰ることが多かった。私は饒舌、彼は寡黙、また逆に彼は興味のあることには矢継ぎ早に質問を投げかける

ところがあって、いつも会話はどちらかからの一方的なものであったが、動物実験に比べて療育を研究にすることの難しさをふと漏らしたことが印象に残っている。

彼が残していったラットの迷路と、療育場面を収録した大量の VHS、8mm、DV ビデオの山を見ると、彼が常々抱いていた、療育の実践をどのようにして研究にすることなのかという悩みは解決できたのかと尋ねたい思いに駆られる。実験行動分析学から行動分析学の実践への軸足移動がようやく安定しようとした矢先の訃報だったのである。心から冥福を祈りたい。

寺田雅英さんの思い出 関西学院大学 中島定彦

寺田雅英さんと最初にお会いしたのは今から 22 年前のことである。上智大学の 3 年生だった私は、故・平井久先生のゼミ（学習心理学研究室）と西川泰夫先生のゼミ（認知心理学研究室）の 2 つに属していた。その頃、認知心理学研究室の助手を務めていたのは、立教大学を卒業後、慶應義塾大学の大学院で佐藤方哉先生に学んだ田中毅さんで、当時、慶應の大学院生だった寺田さんは、先輩の田中さんを通じて、認知心理学研究室の大学院生だった杉原光雄さん、学習心理学研究室の大学院生だった岩橋俊哉さんたちと仲がよく、上智にも時折姿を見せていた。私はその頃、米国の Robert Epstein が Skinner ともに行った「知的行動」のハトによるシミュレーションに関心があり、それに関連したテーマで卒論研究を行いたいと考えていたし、ちょうど佐藤先生の特講が上智で開かれている年（隔年開講だった）で、大学院は佐藤先生のところで学びたいと思い始めていたから、杉原さんや岩橋さんから寺田さんを紹介してもらえたのはとても嬉しかった。

その後、私は幸い慶應の大学院に入学することができ、佐藤先生の下で学ぶことになった。と同

時に、寺田さんからハト実験の手技とコンピュータによる実験制御法を教わることになった。特に、電子回路の基本や半田づけについて厳しく指導いただいた（この点については、現在私が書いているブログ「シドニー日誌」に少し詳しく述べた（11月21日付、http://sydneylog.cocolog-nifty.com/blog/2007/11/post_e6eb.html））。厳しい指導ではあったが、怒鳴られた記憶はない。これは私がよい「生徒」だったためではなく、寺田さんはほとんどどのような場合にも声を荒げるようなことがなかったからである。また、慶應では、私の大学院入学当時、研究員の堀耕治さんと、院生の寺田さん、すでに修士課程を終えられていた小林廉一郎さんの 3 名が毎週 1 回、夜に、最新の専門誌掲載論文を紹介しあう勉強会を開いており、その会にも加えていただいた（堀さんが埼玉医科大学に助手として赴任されてからは、残りの 3 名で開催され、私が慶應を去るまで続いた）。この勉強会で寺田さんから学んだことは多いが、そのうちの一つは、実験手続きの細部も結果に大きく影響するので、その点に十分注意して論文を読むべきだということである。

寺田さんは小林さんとともに、日本行動分析学会の事務局幹事として学会事務を担当していた。博士課程に進んだ私は、小林さんの後任として、寺田さんとともに事務局の仕事をさせていただくことになった。ビジネス文書の書き方や社会人としてのマナーなども、学会事務局の仕事を通じて寺田さんから教えていただいた。ちょうどその頃、学会誌『行動分析学研究』の印刷所が大阪の二瓶社に変わることになり（なお、これをきっかけに行動分析関係の書籍が二瓶社から次々出版されることになる）、上京された二瓶社社長の吉田三郎さん（関学心理OB）に寺田さんと一緒にお目にかかって、色々と打ち合わせをした。当時まだ珍しかった電子ファイルでの入稿システムの採用を吉田さんから提案され、そのための体制作りが求められた。電子入稿システムによって校正業務が大幅に効率化されたが、その頃は手書きの原稿もまだあったので、受理された手書き原稿をワープロ入力して電子ファイル化したり、著者からいただいた不備の多い原稿ファイルを編集用に整形したりする必要が生まれた。寺田さんと二人で分担して、夕方から深夜までこうした作業を行った

（昼間は授業があったり、実験をしたりしていたからである）が、愚痴をいう私とは違い、寺田さんはいつも根気強く仕事を続けておられた。

ところで、寺田さんの当時の研究テーマは、触覚弁別刺激によるラットの迷路行動の制御だった。迷路の分岐点（十字路）に置かれた矢印に触れ、その向きにしたがって右折、左折、あるいは直進するということを繰り返して、最終的な目標地点にたどりつく餌があるという実験事態である。私の知る限り、このようなテーマの実験は過去にも先にも例がない。十分訓練されたラットであれば、新しいパターンの迷路でも矢印にしたがって正しく進路を選ぶことができるという報告は、学術的価値の極めて高いものだと思う。視覚刺激による行動制御の可能性を避け、聴覚刺激による妨害を防ぐため、地下の真っ暗な部屋で息を殺してじっとラットの行動を長時間観察・記録し続けた忍耐力は、寺田さんならではのだろう。

私が慶應を去ってからも、駒澤大学に学会事務局が移るまで、寺田さんは事務局を切り盛りされていた。実に誠実な方だった。合掌。

私とABA (2): いろいろな国際会議

帝京大学 佐藤方哉

最近、ABAの大会（国際行動分析学会年次大会: Association for Behavior Analysis International, Annual convention）に参加する日本人がとて増えてきたようです。そこで、前号から3回連続で、ABA参加大ベテランのおひとりである帝京大学教授の佐藤方哉氏から、ABAの大会について、お話を伺いました。インタビューを務めて下さったのは、帝京大学の塚田静香さんです。勿論、実際にインタビューを行なって、佐藤先生にも原稿に目を通して戴いておりますが、記事にするにあたって、編者である望月が多少の“創作”を加えております。連載2回

目は、行動分析学に関係する幾つか国際会議の違いについてお話戴きました。

行動分析学の国際大会いろいろ

M: ところで、行動分析学の国際会議も、最近、種類が増えて来ました。ヨーロッパでは、“European Association for Behaviour Analysis”が、国際会議を開いたりしているようですし、北米でも、“Autism Conference”（自閉症会議）という新しい大会が開かれているようです。こう

した大会・会議の区別を教えてくださいませんか？

佐藤: そうですね、英語で convention (年次総会) とか、conference (会議) と呼ばれているものが、日本の学会の年次大会に当たる物ですが、アメリカの国際行動分析学会 (ABA international) が開催している大会が 3 種類あります。1 つは毎年 5 月下旬から北米で開催される大会 (Annual Convention) で、日本で “ABA” と言え、これのことですね。今までお話して来たのは、この ABA の大会のことです。

最近、新しく “Autism Conference” (自閉症会議) という大会が開かれるようになって、来年の 2 月が第 2 回大会のようですが、私は参加したことがないので、よく知りません。

もうひとつは、“International Conference” (国際会議) と呼ばれる大会が、2 年に 1 度、北米以外の世界各地で開催されます。この “International Conference” は、私が ABA の会長を務めたときに提案して始めたものです。アメリカでさえ、地方の行動分析学会には入っているけれど、ABA の本体には入っていないという行動分析家が沢山いるそうです。同じように海外にも、その国の行動分析学会には入っているけれど、毎年アメリカで開催される ABA の大会には参加したことがない、という行動分析家は多い筈です。そこで、自分の近くの国で大会が開かれれば、そういう人達も参加しやすくなるだろうと考えたのです。それに、ABA は “international” (国際) と名乗っていながら、それまで、アメリカ以外の国で大会を開いたことはなかった。それもおかしいと思いました。そこで、北米以外の地で開催する大会を提案し、2001 年に第 1 回大会をイタリアのヴェネツィアで開催しました。2 回目はブラジルのサンパウロ郊外、3 回目は中国の北京、4 回目の今年はオーストラリアのシドニー、次回 5 回目は、2009 年に北欧ノルウェーで開催されます。

M: ヴェネツィアの大会は 14 世紀に建てられた修道院が会場で、とても印象深かったです。折り悪しく、同じ年の 9 月 11 日にアメリカで大規模なテロがあり、その影響か参加者が少なかったのが残念でした。そう言えば、第 2 回大会も、北京で開催の予定が、SARS の流行でブラジルに変更になりました。滑り出し、不運に見舞われましたが、その後、順調に回を重ねてきました。

佐藤: この会議は、会長講演などはありませんが、内容的には北米で開かれる ABA の大会と差はありません。会場や食事、エンターテインメントはもとより、大会の内容にも、開催国の特徴が現れます。今年のシドニーの大会のように、開催国の行動分析学会と合同開催、ということもあります。

M: 北米の ABA 大会よりも規模が小さいので、同じポスター発表でも、北米では見に来てくれないような、有名な先生が声を掛けてくれたりするの、我々日本人にはメリットがあるような気がします。

佐藤: そう、アメリカ人の大物行動分析家で、外国に行くのが好きという人が何人かいて、80 歳を過ぎたような人でも、こまめに大会に来ています。パーティーの席などで、そういう人達と話をするチャンスも、北米の大会より多くなると思います。

行動主義と行動科学の国際会議

M: もうひとつ、“International Congress on Behaviorism and the Science of Behavior” (行動主義と行動科学の国際会議) というものがありますが、...

佐藤: それは以前の名前で、今は “International Congress on Studies of Behavior” (行動

研究の国際会議)という名称になりました。“Behaviorism”という言葉に反発する人達も取り込もうということからこのようにです。これはABAとは別に、アラバマのオーバーン大学 (Auburn University) にいるピーター・ハルツェン (Peter Harzem) と、リベス (Emilo Ribes Iēsta) が始めたものです。アメリカ人ではないこの2人は、アメリカはもはや、行動分析学をリードして行く国ではない、これからは、アメリカ以外の国が行動分析学を発展させて行かなければいけない、という主張のもと、2年に1回、世界各国で開催されています。この会議の特徴は、英語とともに、開催国の言葉が必ず会議の公用語に採用されることです。1996年に日本で開催したときには、日本語も公用語でしたので、日本からの参加者は日本語で発表することもできましたし、主要なセッションには同時通訳を用意しました。

第1回はイタリアのパレルモで、その後、メキシコ、スペイン、スイス、日本などの国で開催されてきましたが、私はスイスを除いて全ての大会に参加して来ました。参加者の大半ABAの大会と重なっていますが、主催国で、行動分析学に限らずに広く参加者を募ったり、主催国の学会と合同開催したりすることがあるので、それぞれに大会に違った特徴が加わります。アメリカのオーバーン大学で開催したときは、パーティーの会場はハルツェンの自宅でした。

M: それほど、ごちんまりとした会だったということですか? それとも、ハルツェンは大邸宅に住んでる?

佐藤: 40-50人はパーティーに来たと思います。庭も使いましたから。それぐらいは入れたのでしょうか。去年はスペインのサンチャゴ・デ・コンポステラという、中世に栄えた巡礼都市で開かれました。来年はブラジルと聞いていますが、まだ決っていません。

M: ハルツェンは御元気なんでしょうか? 御病氣と伺ったことがありますか?

佐藤: 今年のサンディゴのABAには来ていました。シドニーでは見掛けませんでした。以前、ワトソンの本を出すと言っていたのに、なかなか出ないので気にしています。その本のために、ワトソンの息子さんにも会ってインタビューしたそうで、殆ど書き上がっていると聞いていたのですが...

T: 今までで、一番印象に残っているABAの大会はどれですか?

スキナー最後の講演

佐藤: やはり、私が初めて参加した1979年の大会です。日本人が10人近く一緒に行った、というのも印象に残っている理由です。このときは、慶應義塾大学が、日本心理学会の年次大会を担当した年で、日心の大会に、スキナー先生を御招待することに決っていました。その直前の打合せをしたいと考えていたところ、当時、東京学芸大学にいらした山口薫先生が、スキナー先生が必ずABAの大会に参加されることを教えて戴き、ABAに誘っていただいたのが参加したきっかけでした。

大会全体ではありませんが、スキナーが亡くなる前の年、1989年のABAの大会で聴いたスキナーの講演も忘れられません。会期最終日に、スキナーの講演があって、色々な話をされました。そして、まだ基本的な問題について、研究されていないことがある、もっと実験的にやるべき研究がある、と話された後、いずれにしても、オペラント条件づけの研究が、とても盛んになってきた。別に私のために、皆さんが研究を盛んにしてくれたのではないけれど、ありがとう。と講演を締めくくりました。その言葉を聴いて私は、もしかすると、これがスキナーの最後の言葉になるのでは、という直感したことを覚えています。その時、スキナー自身、自分

が白血病であることを知っていたのかどうか分かりません。でも、もしかすると、スキナー自身にも、これが最後になるかも知れない、という予感があったのかも知れません。そう思いたくなるくらいの、強い印象が残っています。大会最終日にスキナーの講演がある、ということ自体、珍しいことですが、どんな事情があったのか、詳しいことはわかりません。

あと、エピソードとしては、アンドロニス (P. T. Andronis) たちが、ハトの象徴的攻撃行動の発表をしたときのことが印象に残っています。発表自体興味深い内容だったのですが、少し粗いところもありました。スキナー先生も聴きに来ていて、「ひとつ前のスライドを、もう一度みせてくれないか?」と言われたのです。そのとき、アンドロニスたちが異常に緊張していたのが今でも印象に残っています。

T: アメリカ人でも、スキナー先生の前に出ると緊張してしまう?

M: 以前、スキナーが ABA の大会に出ている人も誰も特別扱いしない。満員のセッションにやってきて、座る席がなくて、スキナーが床に座っていても、誰も席を譲ったりしない、というお話を伺いましたが、学問的な文脈になると、話しは全然違う、ということでしょうか? 象徴的攻撃行動の研究だとすれば、当時アンドロニスは、シカゴ大学の大学院生か、大学院を出たばかりぐらいですよ? 大学院生の立場で、スキナー先生から質問されたら、緊張するでしょう...

ところで、スキナー先生は、ABA の大会では何と呼ばれていたのですか? 愛称で呼んで貰えないので、“Call me Fred” という札を出した、という話を聞きましたが。

佐藤: それは、ABA の大会ではなく、自宅でのことらしいです。スキナーの娘さんの 1 人、ジュリー・ヴァーガス (Julie S. Vargas) は、現在

“The B.F. Skinner Foundation” の会長をされていますが、その夫君が社会心理学者のアーネスト・ヴァーガス (Ernest A. Vargas) です。ヴァーガス先生から見れば、スキナー先生は義理の父親に当たる訳ですが、どうしても“Fred” とは呼べず、いつも“Professor Skinner” と呼びかけていたらしいです。そんなある日、スキナー先生の御自宅に遊びに行ったら、“Call me Fred” という札が置いてあった...

M: スキナーの愛称は、何だったんですか? ケラーの愛称も“Fred” で紛らわしかったというような話をどこかで読んだことがありますが...

佐藤: スキナーの愛称も“Fred” です。でも、スキナー本人に向かって“Fred” と呼びかけている人は、私は見たことがありません。

M: カタニアとかベア (D. M. Baer) のような、第 1 世代の大物行動分析家たちでも、愛称では呼ばなかった?

佐藤: 私の記憶では、彼等も本人に向かって“Fred” とは呼びかけていなかったと思います。私のところに来る手紙には、“Professor Sato” と宛名が書いてありました。だから、こちらから“Dear Fred” とは書けず、ずっと“Professor Skinner” と書いていました。勿論、お話するときも、“Professor Skinner” と言っていました。

M: 私が ABA に最初に参加した時、戸惑ったのは first name call でした。受賞式のような改まった席は別にして、普通のセッションだと、座長も first name で呼ぶし、名札にも first name しかなかった。英語の本を読んでも、論文を読んでも、書いてあるのは名字ですから、ABA の会場で、いきなり first name を聞いても、最初は誰のことかさっぱり分からない...

[編者]: インタビューは2時間に及び、まだまだ興味深いお話は尽きませんが、今回はこの辺

で...。次回は、ABA 会長の思い出などを御紹介致します。

連載: いま、こんな研究しています (4)

筑波大学 村本浄司

私は施設に入所している行動問題を示す自閉症者に対しての支援法に関して研究しています。現在、知的障害者においては養護学校卒業後の半数以上が福祉施設に入所もしくは通所しています。とりわけ、支援方法が難しい自閉症者の場合、その対応方法次第では、重篤な行動問題を示すことが少なくありません。そのため、自閉症児者に対して効果が認められている ABA (応用行動分析) の普及が急務であると考えられます。

以下、この研究分野の概説をある施設の職員に対する ABA の勉強会にて、会話形式で表現しようと思います。

とある知的障害者更生施設での出来事 (フィクション)

職員 A: 「それでは時間になりましたので ABA 勉強会を始めさせていただきます。本日も大学の院生の さんに、施設での ABA に基づいた支援に関する講義をお願いしたいと思います。では さん、お願いします。」

院生講師: 「職員の皆さん、お忙しい中、今日も ABA 勉強会に参加いただきありがとうございます。普段より利用者に対する支援では職員の皆様には頭が下がる思いです。」

全職員: 「...。」

院生講師: 「さて、今回までの強化やシェイピングのような理論とは違ってかわって、入所施設において利用者が示す行動問題に対する支援についてお話したいと思います。」

職員 B: 「そっちの方がいいよ。前回ちんぷんかんぷんだったからさ。」

院生講師: 「そうですね...。確かに、現場に即した内容の方がわかりやすいと思ったのですが、ABA の説明として、強化はどうしても外せないんです。」

職員 C: 「強化? 要するに、褒めりゃいいってことでしょ。なかなか普段、誉め慣れてないから、いきなり褒めろって言われてもなあ...。」

職員 A: 「そんなこといっても、仕事なんですから褒めてくださいよ。」

職員 C: 「...。」

院生講師: 「あの...褒める = 強化ではないんですが...。まあ、とにかく褒めるというか、『相手の喜ぶようなことをする』の方が本来の強化の意味に近い気がしますね。」

院生講師: 「さて、前回までは行動問題にも強化子がある、我々は行動問題の機能といっていますが、そのことに関してお話ししました。さて今回は...。」

心理職員: 「ちょっと待って! その機能のことなんだけども。自傷をしている人が注目とか逃避とか要求とか、ましてや感覚刺激だけ? そういうの全部の意味でやっているように見えなだけで...。」

院生講師： 「いえいえ。それら全部の機能を持ち合わせているとは言っていません。場面や結果によって、注目を得るためにやっていたり、嫌なことから逃げるためにやっていたりするわけです。だからその行動のきっかけや結果を見ないとわからない。それが機能的アセスメントの目標なんです。」

心理職員： 「ふーん…。なんかよくわかんねえなあ。」

院生講師： 「そうですね。例えば、何もすることがないような時間に、その人の周囲に職員がいたとして、壁に対して頭突きをした結果、あわてて職員が止めに来たことを繰り返していたとします。その場合、その後もう一度壁に頭突きを繰り返した場合、その人にとって職員が止めにくることが強化子になっていると考えられます。」

心理職員： 「要するに、自傷をしたときには、あわてて止めちゃだめってこと？じゃあどうすりゃいいの？目の前で血だらけになっているわけよ。そりゃ誰だって止めるでしょうが!!」

院生講師： 「注目の獲得が主な機能の場合、消去…まあいっさい見向きもしないことができるなら、そうして欲しいのですが、本人の安全のためには本人に気づかれないように後ろからそっと止めるというような対応も重要ですね。」

職員 C： 「力の弱い女性職員だと無理じゃない？だって某 さんはめちゃくちゃ力が強いよ。」

院生講師： 「うーん…。確かにそうですね。だから、消去やその場の危機介入だけではうまくいかないんですね。きちんと行動問題と同じ機能を持つ代替行動を教えないと…。」

心理職員： 「代替行動といっても、それをどうやって考えていいかわかんないよ」

院生講師： 「そうですね。おっしゃる通り確かに難しい…。しかし、必ずしも代替りの行動を教える必要はない場合もあるんです。利用者が現在少なからずもっている適切な行動を積極的に強化して、その行動の頻度を増やしていけばいいんです。例えば、話し言葉を持たない利用者が何かを要求するとき、その頻度は少ないが職員の手を引くことがある場合、その行動を強化していけばいい。しかし、それだけでは、行動のレパトリーがどうしても限定されるので、ジェスチャーや絵カード、VOCAなどの代替行動も教えた方がいいかもしれません。」

職員 A： 「そうですね。実は重度の利用者でもこちらが話しかけたり、褒めたりすると微妙ですが表情が変わったり、笑顔になることがあるんです。だから、重度の利用者は何もできないと決め付けるのはよくないと思います。」

院生講師： 「まさしくその通りですね。それと話は変わるのですが、支援を行うにあたって、その施設や職員、利用者もしくは土地柄の文化…といいますが、やり方にあった支援法でなければなりません。それとも関連しますが、われわれのような外部からの支援者だけしか介入できないともなれば、行動問題は一時的には減少しても、職員の方々全員がその支援法を知らなければまたすぐに増加してしまうでしょう。」

職員 B： 「でもさ、職員によって対応方法が違うからさ！せっかく俺が強化したり、介入したりしてんのに、やらない人がいたり、やたら怒ることしかない人もいてさ…。そのせいで、ますます行動問題が増えてんだよ。ほんとやる気なくすよ。」

院生講師： 「うーむ。職員によって対応方法に差があるのは仕方ありませんが、それは利用者に対する支援の障壁にならない程度のレベルの差まで小さくする必要があります。それはわれわれの今後の課題ですね。」

院生講師： 「とある施設では知的障害者”通過型”入所施設という表記になっていました。これはすばらしい表現だと思います。先ほども申し上げましたが、入所施設は収容施設であってはならないと思います。あくまで更生＝リハビリテーションであるべきです。そして利用者が援助つきであっても地域で1人で生活するスキル

を教授する。現行の障害者自立支援法は施設利用者の収容人数を減らし、施設利用者が地域で生活するための具体的な目標数値を出していません。しかし、その間に具体的な支援方略が少ない。支援を具体的に形として表していかなければならないと思います。そういった意味で、ABAは支援の形としては、我々に対して様々なヒントを与えてくれます。」

職員 A： 「とりあえず、時間が来ましたので、本日の勉強会を終了したいと思います。皆様お疲れ様でした。」

編集後記

ニュースレター編集部

今回の49号も17ページという充実した内容でお届けすることができました。私にとっても常に良き先輩であった寺田さんの悲しいニュースが含まれているのは残念ですが、PDF版電子配布と宅急便メールの採用の御蔭で紙数の制

約を受けずに編集できるのは大変なメリットだと思います。beemailもスタートし、会員の皆様との情報交換の手段も一層充実致しました。beemail, J-ABA Newsともども、皆様からの活発な投稿をお待ちしております。

ニュースレター編集部よりお願い

- ニュースレターには個人情報に記載されている場合があります。御覧になった後、処分の際には十分に御留意下さいますようお願い致します。
- さまざまな内容の記事を随時募集しています。詳しくは望月までメールでお問い合わせ下さい。尚、記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析

学会ウェブサイトで公開いたします。

192-0395 八王子市 大塚 359
帝京大学文学部心理学科内
日本行動分析学会ニュースレター
編集部 望月 要
E-mail: moc@main.teikyo-u.ac.jp